

東アジア海の文明を求めて

鶴間和幸

私は今ご紹介ありましたように、九六年に学習院に移ってきました。一度史学会で、新任のときに報告したことがあります。今回は、研修の教員はその翌年の史学会で報告するという慣例になっていますので、私が指名されました。

タイトルは東アジア海の文明を求めてというのですが、レジューメの方はもうちょっと軽く、「東アジア海の文明を訪ねて」になっています。本音は訪ねてという内容ですので、気楽にお聞きください。

この一年間、三月までですけれども、日程に書いてあるようにほぼ毎月海外に出ています。合計すると八〇日ぐらいになります。

四月はちょっと特殊でしたけれども、平壤の社会科学院、このときは高句麗の壁画と、漢の楽浪郡の遺跡を見ました。それから、韓国、中国、台湾を回りました。私は今プロジェクトをやっていますので、青森、函館、それから香港、そして最後は、東アジア海と地中海を比較したくて、ポローニャ大学に行きました。そのために、いろいろ

ろな話が出てきますが、画像を見ながらお話ししていきたいと思えます。

これは中国の衛星画像です。東の海と中国の内陸が写っています。内陸のところが白くなっています。ここを注目してほしいと思います。東アジア海文明という歴史を考えていくときに、私たちは決して海だけではなくて、その海にそそぐ二つの中国の大河、黄河と長江に注目しています。そこは非常に広い平原をつくっています。そこと海との関係、そして朝鮮半島や日本との関係を研究しているわけです。

東アジア海文明の歴史と環境、プロジェクトの方のタイトルです。ですから私の研修のテーマも同じです。実はこの仕事もやらざるを得ないということもありまして、全く一年離れるわけにいかないというところで、いろいろな史跡を見してきました。

これは私たちのプロジェクトのなかで、東文研の村松君がつくったものです。中国に黄河と長江という大きな川が東の海に注いでい

ます。その注いだ海にはいろいろ名称があります。黄色で書いたのが日本での海の名前、日本海、それから東シナ海、黄海、黄海は中国と共通ですが、青で書いたのが朝鮮半島の呼称です。日本海のことをトンへ（東海）と言います。朝鮮半島の西側をセへ（西海）と言いますね。つまり自分たちの世界から東と西の海という意味です。それから赤で書いたものは中国の言い方です。日本海は日本海、漢字で表記しますね。それから黄色い海、黄海です。それから中国の東ということで東海という。このように名称がまちまちですから、いちいちまちまちの名称を使うよりは全部あわせて東アジア海という名前を使いはじめました。これは初めて我々が使いました。中国語ではトンヤーハイ（東亜海）、韓国では、韓国の大学の先生たちが言うように、「トンヤンヤハ」といい、そういう言い方がもう既に定着してきています。

いろいろ海というのは、摩擦があるわけですね。政治的な摩擦があって、いわゆる領海の問題、それから環境汚染の問題、様々な問題が今噴出しています。それは、日本と中国と韓国、北朝鮮の政治レベルの摩擦でありますが、私たちができるのは歴史学者として共通の文明圏を過去にさかのぼって見ていくことです。さかのぼるということは、けっして過去にわかつていることを我々が繰り返すのではなくて、今まで過去の歴史の中で掘り起こされていないものを掘り起こしていく中で、共通の歴史を考えよう、文明圏を考えようというのが目的です。

ここに、東方大平原と書きましたけども、以前私が中国文明の展覧会をやったときに、黄河文明とか長江文明ではなくて、中国には

あの広い平原があるからこそ、一つの中国という世界が生まれ、また非常に求心的な文化が生まれたのだと主張するために、黄河と長江の下流の名称を東方大平原と名づけました。実は華北平原とか華中平原という言い方があるんですけども、共通する名称はありませんので、ああいう言葉を作り出して、今使っているところです。ですから、あの東方大平原と海と、それから日本列島、朝鮮半島、その歴史を考えていこうというものです。

今回は単に港を訪ねるだけではなくて、いろいろな博物館を訪ねました。訪問した港と博物館を挙げてあります。現地を港を見ても、その景観はわかりませんが、そこにどのような歴史があるのかというのは、現地の人たちがまとめたモノの展示を通して理解できるので、いろいろなところを訪ねました。韓国に行きますと、このように海の名前が出てきますね。トンへ（東海）と、ここではセへ（西海）を使っています。セへというのは西沿岸の地域を言っていますので、中国のもっと広い海はファンへ（黄海）という黄色い海というのを使っています。このような名称の違いは今日の課題ではありませんが、私自身はそれぞれの陸地に近いところは、それぞれの地域の人がそれぞれの名称を使っていると思いますね。ですから、わざわざここを例えば平和の海とか、青い海という新しい海の名称を使う必要はないと思います。歴史的に日本海とかトンへとかという言い方で呼称は違っていいんじゃないかなと思っっているわけです。

最近こういう海底の地形図をよく見ることが多いのです。今日は、渤海にしても、黄海にしても、東シナ海にしても、ここは海底の地形が非常にのっぺらぼうで、非常に浅い海だということを強調して

お話ししていきたいと思えます。日本海は非常にでこぼこして、日本海の中には盆地もあり、平原もあります。それから日本列島から東側というのは、トラフと言ったり、海溝と言ったりする非常に深い海がある。つまり私たちが、ユーラシア大陸の一番東側、ずっと傾斜した大陸棚の一番隅っこに日本列島があって、その東側は非常に深い海があるという地形の中で生きているのだということが、いろいろな意味で歴史にも関係があるというふうに思えます。このグーグルで撮った日本列島の衛星画像にもずっと海溝の深いところが見えるかと思えます。

静岡県清水市にある東海大学の海洋科学博物館では、海に関するいろいろな知識を得ることができました。自然系の博物館、北京では例えば国家地質博物館、そこに行きますと、中国の海に関して非常に有益な情報があります。鄭州にある黄河博物館、そこには黄河に関する歴史、それから地質など、いろいろな情報があります。

そういう中で、特に私たちのプロジェクトのような環境の問題を考えたときに、人間の人文社会的な営みと自然環境が非常に密接にかかわっていることに気づきます。その自然系の博物館に行きますと、私たちは当然理系に弱いので、自然科学の知識を得ることができません。それを歴史学と結びつけてみますと、非常に関係のある知識がたくさん得られることに気づきます。

例えば、駿河湾のトラフは水深が二四五〇メートルあり、日本一深い湾だそうです。中国ではこれは考えられないんですね。中国の陸地の前にはせいぜい一〇メートル、二〇メートルの大陸棚の上端があって、だんだん深くなる。深くなっても一〇〇メートルぐらい。

ところが日本列島というのはすぐ目の前、すぐ近くに富士山がありますが、富士山の標高に匹敵するような深い溝がここにあるわけですね。そういう地形の中で私たちは生きています。その海洋科学博物館に日本列島の海岸がこのような形で展示されていました。日本の海岸というのは四種類に分けられます。赤で書いた部分はサンゴ礁の海岸、ピンク色が砂浜の海岸、緑色がリアス式海岸、青が岩石海岸となっています。中国の地質博物館に行きますと、中国の海岸についてはこんな説明がありました。中国の海岸は同じようにサンゴ礁の海岸もあります。砂浜の海岸もあります。岩石、リアス式の海岸もあります。さらにもう一つ、泥が堆積した海岸というのがあります。汚泥質海岸と書いてあります。つまり黄河とか長江が大量の泥を河口に運んで、そこを埋めていく、そのような海岸があります。これが非常に中国的だと思います。その話は後でしたいと思います。

日本海調査プロジェクトで行ったときに、日本にある港の様子が描かれていました。日本には三ヶ津つまり博多坊津、堺、安濃津という港。それから一番私も気になったのが青森の十三湊です。十三湊の海岸が一体どういう海岸であるのか、現地で見ました。

先ほど、東シナ海の水が非常に浅いという話をしました。古代の日本人は、自然との境界の中で苦闘しながら海を渡りました。九世紀に海を渡った円仁が『入唐求法巡礼行記』を書いていきます。円仁は八三八年六月二二日、遣唐使船に乗って、第一九回目の遣唐使の船に乗って博多を出発しました。北東の風が吹いてくるのをしばらく待って、ようやくその風に乗って博多を出港しました。六月二四

日、しばらくしますと海の色が浅緑になったという記述があります。浅い海の色を見て、やがて大陸が近い、陸地が近いといって、そういうことを記述しています。六月二十七日、今度は海の色が淡い緑、白い緑と書いてあるんですが、淡い緑色をしていると。当然、もう陸地が近いのではないかとい、帆柱に登って、遠くに山や島を探そうとしたわけです。六月二十八日、ところがまだ見つからないんですね。六月二十八日、今度は海水が白くなった。しかも黄色い泥のようであった。彼らは、今私たちは長江だとか揚子江と言っていますけども、巡礼行記では、揚州大江といっています。揚州というのは彼らが目指す港町ですが、長江に入ったところのさらに京杭大運河という、運河につながる港です。ですから揚州を流れる大きな長江の意味で大江と言っています。黄色い泥というのは、揚州大江ではないかと考えています。そして、海は浅くて、波は高くて、深さは五尋⁵、つまり約九メートルしかないと言っています。そして彼らは揚州に入りました。つまり海の色を見て、大陸棚がだんだん浅くなっていくことを彼らは知っていたわけです。これが遣唐使船、大体四く五〇〇人の者が四艘の船に分乗して、大体一艘当たり一〇〇人ぐらい乗るのでしょうか。こういう船で四艘のうち一艘が揚州の沖合に到着しました。これは復元した遣唐使船だそうです。後でも中国の船が出てきます。当時の船は底が平らで、箱型ですね。帆柱で進行するわけです。

これは遣唐使船の航路です。当初は北側、これは皆さんご存じでしょうけれども、朝鮮半島の西岸を通って、それから山東半島の登州に入りましたが、だんだん南に移っていく。それは朝鮮半島の政

治情勢とかかわっているわけです。やがて南東路、南を通ります。円仁のときには一気にここを渡っていくわけです。

衛星画像を見ますと、この辺り、非常に白くなっています。この渤海湾の白さというのは現在黄河がたくさんの泥土を含んだ黄河が流れ込んでいるからです、天津辺りは海河という河が流れ込んでいます。

北京の国家地質博物館に行きますと、こんな説明がありました。

これは中国の近海空間地理という本からコピーした海底の地図です。右側の上が渤海、それからその下が黄海、真ん中下が東海、中国では東シナ海のことを東海と言います。博物館では中国の海の違いを説明していました。渤海は非常に閉じられた海です。渤海海峡はわずか二〇〇キロぐらいしかないでしょうか。山東半島の蓬萊から遼東半島の一番南側の大連、旅順辺りまでが海峡です。非常に閉じられた海ですから、こんな特徴があります。渤海は、七・七万平方キロ、水深の平均は二五メートル、非常に浅いのです。この海底図を見ても、二〇メートルの水深線が走っています。それからもっとも深いところでも八六メートルしかない。さらに地質博物館の説明では、塩分濃度が記されていて、この海が一番少ないんですね。わずか三%。東海とか黄海に比べて一番低い。それから、それが閉じられた海に黄河などの淡水がそぐわけですから、薄まっているんだらうと私は解釈します。この中に海峡がありまして、廟島列島という。ここには三〇ほどの島があります。中国古代史、特に秦とか漢を研究していますと、内陸の国が東方の国を征服して古代帝国を築き上げたので、むしろ海辺の国の征服者の立場で歴史をやって

いることになりませんので、海の世界というのは縁がなかったんです。ただ、始皇帝が東方を滅ぼしたときに海と出会うんですね。出会って、しばしば巡行し、五回のうちの四回は東に向かって巡行しました。そこでしばしば山東半島、渤海湾、それから東海に向かって離宮を築きました。ですから、海への単なる関心ではなくて、その秦という帝国が東方の世界をどう考えたのかということに関心を持ってきました。多分今回の私の仕事も、その延長にあります。渤海の秦皇島では、秦の始皇帝が巨大な離宮を築きました。それからこの渤海湾には、三神山という蓬萊、方丈、瀛洲という三つの不老不死の仙人の住む島があるという伝説の島があります。『史記』の封禪書の中に、その島には仙人がいて、この沿岸の人たちが船を出してその島を見かけるところまで行くのですが、実際近づいてみると水の下に消えてしまうという、そういう記述があります。それはおそらく山東半島の蓬萊というところでは今でも初夏に蟹気楼、中国では海市という現象が見える。つまりここは非常に狭まっていて、島の多いところですから、初夏の海水面の空気があたたまったときにそういう現象が見えるのです。ですから『史記』に書かれた三神山の伝説というのはおそらく蟹気楼と関係があるのです。そういう独特な海が渤海です。

それから黄海というのはここですね。実は古代には黄海という言葉の方は全くありません。いずれも渤海と呼んでいたようです。黄海というのはいつかから始まったのか、確定的なことは言えないんですが、かなり新しいようです。唐の時代にも黄海という言葉は出てきません。黄河が南流した時期が五〇〇年ほどあります。その、山東

丘陵の南側にそそいだときに、水が黄色くなったということで黄海と呼んできたわけですね。黄海については、こんな説明があります。黄河の水が流入して、大量の泥を運んだために、海中の浮遊物質が多くて、海水の透明度が低くなったので黄色になり、黄海と呼ばれることになったと。古代には渤海と黄海を区別していない。ですからだんだん黄河が南流して黄色くなったということなんでしょうか。実際黄河が南に流れたのは一三五年から一八五五年、それから二〇世紀にも一九三八年から一九四六年、南流しています。あわせまして、五〇〇年余りですね。五〇〇年余りの泥土が東に流されて、黄色くなったんでしょうか。黄海の深さは一番深いところで一四〇メートル、それから平坦で面積も三八万平方キロです。どこまでが黄海というのかと言いますと、長江の河口から済州島を結んだところですね。ここまです。先ほど海水の塩分の濃度の話をしましたけれども、ここでは三・二%ですから、渤海よりも塩分が強い。山東半島の辺りにしても、非常に海塩を古代から採っていた地域でもあります。

それから、黄海の南側、台湾海峡までを東の海、東海というところですね。東シナ海と私たちは言っています。東海が一番開けた海です。南北一三〇〇キロ、東西七四〇キロ、面積は七十七万平方キロメートル、水深の深さは一番深いですね。平均三五〇メートル、最深で二七一九メートル。これは沖縄トラフに近いところですね。透明度は二〇〇メートルです。ここには一〇〇キロ以上の河川が四〇以上流れ込んでいます。おそらく広く開けた海ですので、塩分が一番濃くて、三・四%というような説明がありました。そして、先

ほど言ったように中国の海岸というのは、泥が堆積しているというのが日本とは違ふところです。これは渤海湾です。ここに現在そそいでいる黄河、黄河の跡がありますが、この辺りはほぼ一〇〇年ぐらいで、一〇〇キロ以上の堆積地が生まれました。

先ほどの海洋博物館に行きますと、こんな記述がありました。円仁の『巡礼行記』の中に海の色の違いがありました。太陽の光は海中に入ると急速に吸収されます。特に赤い色が最も早く吸収される。そしてつぎに黄色が吸収される。黄色は大体五〇メートルぐらゐまでは色は残るんですけども、これ以上深くになると、黄色という色が吸収されます。ですから黄海の部分というのはもちろん沿岸に流れた土砂の色で見えるわけですけども、非常に浅い海だということがわかります。だんだん深くなりますと、青というのは四〇〇メートルぐらゐまでで吸収されます。これ以上に深くなると、濃紺、紺ですね。ですから『巡礼行記』の中にも九州を出て最初は非常に濃い紺色だという記述がありました。そういう色の変化というのが科学的には、このように説明がされます。

夏には台湾に行きました。七月一四日、成田から台北に飛び、市内に入りますと、雨が降り続いて、台風が来ていることに初めて気がつきました。飛行機への影響はありませんでした。ホテルに泊まると、ホテルのフロントに、こんなパネルがお客さんのために準備されていることに気づきました。台風が台湾を直撃すると、台湾海峡に抜けていくという図です。私が着いたのが一四日ですから、一四日の一時にはここまで来るといふ図がサーピスとして挙げられていました。ここでふと見ると、どうも私たちが見慣れている台風

の進路と違うわけです。私たちの研究の中で、災害というのをどうとらえるのか、東アジアの海でどういふ災害があるのか、災害には地震もあり、台風もあり、津波もあり、いろいろ災害、あるいは干ばつとか洪水もあります。このとき、台風のこの経路を見て、私たちの見慣れたものと違ふので、考えさせられました。このときの台風は日本で言いますと台風四号ですが、台湾では名前がついていました。フィリピン辺りで発生した台風に国際的な共通な名前がつけられます。このときにつけられたのは、碧利斯台風というものです。これは日本でも、気象庁のインターネットを見ますと確かにこういう国際名称がついています。日本ではこういう名前はなじみがないというので、使つてないようです。ちなみにこの年の台風一〇号を後で確認しましたら、孫悟空の悟空台風、悟空という名前がついていました。ですから、日本でも台風一〇号と言わずに、孫悟空という名前をつけてもいいんじゃないかと思いますが、日本では数字で呼んでいます。

このとき不思議に思つたのは、台湾では東南から西北に台風が抜けて、そして大陸の福建に達するというコースを取つていたことです。考えてみれば当たり前で、台風は日本では東に進みますが、緯度の低いところでは、東の風に乗って西に進んで、やがて高緯度になりますと偏西風の影響で東北に進むわけです。この行き先の福建省のこの辺りには泉州という古来の港があります。ここは非常に大事なところでありまして、宋元時代の沈没船が発見されたところです。ですから、東アジアの海ではたくさん沈没船がありますが、船が沈んだ大きな理由はおそらく災害でしょう。台風であり、大風

であり、津波であるかもしれません。そのようなことで私たちは、気象、台風の動きというのも頭に入れておかなければいけないのかなというふうに思いました。

香港では、香港島から九龍のほうを見ました。ここに海事博物館という博物館があります。海洋博物館というのとはどちらかというところと自然系の海を紹介した博物館です。海事博物館といえますと、防衛だとか海に関する人文社会系の博物館です。香港海事博物館は二〇〇五年にオープンされた新しいものです。海防博物館はちょうどビクトリア湾に面する南側の香港島のところに、かつて大砲を沖合いに向けた位置に、造られています。

この海事博物館では、面白い展示をやっていました。イギリスから提供された写真の展示のコナーがありました。この博物館全体は、古代館と現代館に分かれています。古代館では海運の歴史をたどり、現代館では海の科学技術、それから香港の港運業、その歴史が説明されています。その中に一九〇六年の九月一八日に香港を直撃した台風の記録が展示されていました。これはイギリスのフェニックスという砲艦が沈没したときの写真です。そしてまた、当時の復元経路が示されていました。復元経路というのは、一九〇六年の災害ですから、そんな時期の気象情報がないわけですから、当時のいろいろな情報をあわせて、復元した経路です。先ほどの台湾よりは南側をずっと真西に向かった経路です。この台風については当時まだ名前の付け方は十千十二支でつけていました。丙午台風とか丙午風災と命名していたようです。一人人ほどの犠牲者があって、二時間ほど大変強い大風が吹いたという記録があります。そしてまた

このことは、欧米の新聞にも書かれて西側にも伝わったと紹介されていきました。

私自身まだ泉州には行っていませんが、私たちのプロジェクトのメンバーが泉州に行った写真です。院生の福島恵さんから提供してもらったものです。泉州の現在の港です。そこに船の博物館があって、先ほどいった泉州で沈没した沈没船が展示されています。長さ二四・二メートル、幅が九・一五メートルです。復元したものを見ますと、このような形に復元されています。泉州湾宋代古船陳列館というところに陳列されています。この船を見ますと、平面は横広で平べったい楕円形をしています。そして、船底がV字型になっています。韓国の新安沖、木浦^{モッポ}というところでも沈没船が発見されましたが、それも同じようにV字型のいわゆる竜骨が真ん中に通っていた形です。それまでの船というのは、平底が多いわけです。船と船との間は最近いろいろなところで発見されており、近海だけではなくて、先ほど東方大平原の話をしました。中国の運河の中でも船が発見されています。レジュメにも書いてありましたけど、淮北という淮河の流域です。そのようなものを比較すると、いろいろな船の形がわかります。当初の船というのは、できるだけたくさん船を積むために平底で四角い形をしていたのですが、やがてその沿海から遠洋、つまり東シナ海を渡ったりすると風に弱くて揺れますので、船底をV字型にして、そして隔壁という横に部屋を仕切る壁を作りました。泉州沖のものは、一三の部屋に仕切られていました。その一つに水が入って積荷がぬれても、ほかの部屋に影響しないのです。全体の重心をできるだけ下げて、波に揺れてもまた元に戻り

やすい構造にしているようです。この種の沈没船があちこちで発見されています。

今のプロジェクトでは、最後に展覧会をやる計画をしています。北京にある国家博物館が渤海湾を中心に水中考古学の技術で、幾つかの沈没船を掘っています。最近でも福建省の東海平潭県という福州の近くで、清朝の時代の陶磁器船を大量に掘って、特に染付を中心に大量に出してきました。それを日本で展示してもいいという話があります。いまのところ四つぐらいの大学に声をかけて連携して、水中考古学の成果展をやるという話を進めているところです。学習院には、なかなか展示する場所がないのですが、陶磁器というのはそれほど場所はとりませんので、北二号館の一階の展示室で開催できるのかなというふうに考えています。

韓国、木浦の新安沖の沈没船です。長いカイが見えますね。これもV字型の底をしています。そういう船に乗せられた陶磁器がたくさん出てきています。陶磁器の中でも面白いなと思ったのは、博多の鴻臚館の史跡に行ったときに見たものです。青磁の茶碾輪ちまひきりんです。この部分だけが残されていますが、唐の時代、九世紀のものですね。唐の時代のもものは中国の法門寺でも発見されています。当時の固形のお茶を飲むときに、薬研のようなローラーでまず砕いて、粉にして、そして沸騰した湯に入れて飲むわけですね。そのときの硬いお茶をくだけローラーです。こんなものも日本に伝わってきている。

唐代の、今でも中国に団茶とか、磚茶というレンガのようなお茶が残されていますが、それに近いものが、日本でも最初にお茶が伝わってきたときにあったはずですね。それを砕いて飲むという道具がこ

んな形で大宰府にも入ってきているのかなと思います。これも同じ唐の黄褐褐彩貼花水注という水差しですね。唐代のもはめずらしいですが、宋代以降のものは日本各地のあちこちの博物館で見られます。

鄭州に黄河博物館があります。そこで幾つかの展示を見ました。黄河博物館というのは一九五五年に開館した非常に古い博物館です。私も一九八五年、一年間中国に行ったときに初めてこの鄭州の黄河博物館に行きました。なぜ鄭州に黄河博物館があるのかといいますと、黄河がしばしば氾濫を起こした場所であるからです。河南省の鄭州、そして河南省の開封というところが一番氾濫が多いところです。そこから黄河は東の東方大平原を流れます。そこから扇型にどこを流れてもおかしくないような流れをします。その黄河の展示を一九八五年に訪ねたときには、黄河の治水ということに関心があったのですが、その後、環境史の立場からあらためて見ますと、また見直すべき展示があります。

黄河には非常に土砂が多いのは、黄土高原に森林が減少する、つまり黄土高原の上流の黄土高原の森林を伐採して、そこを段々畑にして耕地がなくなってしまうからです。そうしますと、雨が降ると、表面の土砂が流出して黄河に流れてしまう。表土流出ですね。こんな展示がありました。これは古い資料かもしれませんが。一九五五年です。世界では覆蓋率、地表を覆う森林の率が平均にしますと、二九・六%、中国全体では一八・二一%、黄河流域ですと、五・八五%しかないという。黄土高原には、ほとんど木がなく、どんどん侵食される様子が写真に見えます。そこに一九四六年に黄河

が南流したときの流れが記されています。現在の黄河は北に流れています。ちょうど一九四六年、蒋介石が日本軍に対抗するために、わざわざ花園口というところを決壊させました。その流れが続いているわけです。このときには、一時的に長江にまでそそいでいます。一九五八年と一九三三年の洪水の図です。そこにいきますと、かつて黄河が増水して、土砂を堆積させた地層があるというのです。地層をはぎとって、展示していました。黄土高原では、水士流出して、緑がないですね。土が川に流れてしまふ。この間、私たちは黄河の下流を何回か歩きました。これは山東省の濟南辺りの黄河です。非常に黄色い水が流れています。こちらにも砂のような黄土が見えます。かつて流れた黄河が土砂を堆積させて、その水がなくなりまして、本当に小麦粉のような、粉のような土があちこちに見られるんですね。これが黄河の土砂の乾燥した、砂よりも細かい、ほんとに粉末状の黄色い土です。欧米の古地図を見ますと、今黄河は北を流れています。一七世紀の地図では、南流していたということが示されています。ちなみに、黄海は南京湾と書いてあります。

中国に入りますと、ここに運河がありますので、船でここに入ると、東方大平原の平原も船で行き来できます。ですから、私たちは南船北馬と言いますが、実はこの北の天津、北京近くまで、船で行くことができる。それはなぜかと言いますと、一〇〇メートル以下の非常に広い平原がここに連なっているからです。海の世界の海域と、この平原とが一体になっていることがわかります。

今、中国では南水北調という政策をとって、大工事が始まっています。

ます。二〇〇八年は北京オリンピックです。北京に水がないので、長江の水を三か所で北に流そうという国家プロジェクトです。一ヶ所は、長江の上流と黄河の上流とが非常に近いところを流れているものなので、一番短い線をとる。それから先ほどの大平原の中に、二つルートを選びました。一つは河南省を通るルート、もう一つは、江蘇省から山東省、そして河北省に入るルートです。この三つの工事が進んでいまして、来年までというのはおそらく無理でしょうけども、二〇一〇年以降には完成する様子です。長江の豊富な水を北に持っていくという、そのようなことができるのも、ここに平原があるからです。

私たちは、歴史地図をよく見ますが、これは上海の辺りのものです。先ほどの円仁が上陸したのはこの辺りです。ここから揚州に入ります。考えてみれば、当時ここには、今ある崇明島という大きな中州の島がないのです。崇明島というのは現在中国では台湾も含めると、台湾、海南島に次ぐ中国第三の島です。非常に大きな島ですが、唐代の初期にはようやく水面下に現れてきた、そんな中州です。ところが今や大変大きな島になっています。ですから中国の海岸線沿いというのは、泥質の海岸ですから、今の自然環境と古代史を考えると、泥質の海岸を考えると、はいけません。ですから、今の海岸線はここです。上海市もまだこの唐の時代には海の底でした。ですから円仁が入ったときには、この辺りの浅瀬から揚州に入りました。揚州というのは、今の地図で見ますと、ずっと長江に入って行きますが、当時の海岸線で見ると、そんなに深いところにある港ではないということがわかります。

崇明島に行きました。今でも毎年どのくらいですか、海岸線が沖合いに延びているところです。最近の統計で数キロ、一〇〇〇メートルぐらい入るんですか。その一番突端のところですよ。

これはかつて訪れた琅邪台というところです。ここから私も海に関心を持ってきました。始皇帝が琅邪台というところに離宮を建てて、三か月に滞在したという場所です。これを見たときに、黄土高原の黄色い世界と、東の碧い世界、非常に対比的で、おそらく始皇帝自身も、司馬遷が書いてますけど、多に楽しんでた所です。

これが山東半島の一番突端の成山頭です。ここでも非常に美しい紺碧の海が見られます。

ここからは幾つか港の紹介だけをして、終わります。四月には平壤に行きました。平壤というのは、漢の楽浪郡の遺跡があるところで、今でも大同江という川の南側に何千という漢墓があります。ただ、北朝鮮の人たちは楽浪郡というのを認めていませんから、これは朝鮮民族の楽浪国だという言い方をしています。そこから出てくるものは、漢の漆器だとか、中国風のものが多いのです。もちろんそれだけではないのですが。行ったときに漢墓を一つ掘ってくれました。平山郁夫先生と行きましたので、平山先生のために、漢墓を掘って、翌日何かが出土するはずだからまた来てくれと言われまして。わずか一日で掘ってくれました。翌日行きますと、陶器のかめと、車馬具が出土していました。全体が木槨の小さなお墓です。そこから漆器だとか金属製品が出土しています。

南京も港ですね。中国の港には、古代から近代までいろいろありますが、近代になっていろいろな港が開港されましたね。近代中国

の開港都市、南京条約で五つの港、天津条約で一一、このなかでは北の港が非常に少ないですね。じつは渤海湾というのは先ほども言いましたように、土砂が多いですから、港が非常に少なくて、港を造りにくい。ですから、遼東半島と、山東半島にはありますけども、渤海湾全体には大きな港がない。ですから近代になって開港された港は北が非常に少なくて、南の福建、広西、広東、そして長江の下流域の港です。揚州もそのうちの一つでしょう。そこにいきますと、鄭和が一五世紀に南海大遠征をした船の造船工場が発見され、博物館になっていました。鄭和はいろいろな船を使って南海に出て行きました。復元模型が作られています。

韓国や中国に行くときに飛行機の上からよく写真を撮りました。これは朝鮮半島の南の港です。なかなかこれがどこであるのかというのは、探していますが、わかりません。しかし、こういうものがある一つの典型的な港であるので、写真に収めました。

平壤から北京まで高麗航空の飛行機で飛びました。北朝鮮のこの辺り、本当に緑がなくて、赤い土の色ばかりでした。そこから黄海に出ます。

青森の十三湊は、ラグーンという潟湖に造られた港です。それからリアス式海岸もそうですが、山に迫った港もあります。海に入っている古い時代は十三湖の湖に入って、外洋から隔たっています。中世のときには細いところを入り、細長い中州に十三湊の町が発達します。

北海道の志海苔館は函館の東にあります。中国の古銭が三七万枚も三つのかめに入っていました。大変大量の宋代の、一番新し

いのは明代のものもあるようですが、中国の銅銭が大量に日本に入ってきた。その中に、前漢の武帝の時代の半両銭、それから漢代の五銖銭、王莽の時代の貨泉というのが含まれていましたので、びっくりしました。日本の中世の人たちは、こういう中国の時代を問わず、中国の古代の貨幣も同じように扱っていたのでしょうか。不思議な気がいたしました。

これは、沖縄へ行ったときのヤコウガイですね。沖縄のヤコウガイで作ったさじを、韓国の大邱の博物館で見かけました。そういうカイの貿易ルートなんているのも、おそらく研究はされているんでしょうけど、気になりました。

ここは、十九世紀初頭に香港の海賊が本拠地にした長洲島です。そこで海鮮料理を食べましたら、一つはシジミが出てきました。それから白いエビが出てきました。これはそのメニューです。その中にシジミ料理が出てきて、十三湊でもシジミラーメンを食べる非常においしかったことを想い起しました。シジミというのは、汽水、つまり淡水と塩水が交わるところにいる貝です。この長洲島も、大きく見れば、広州にそそぐ珠江の大きなデルタ地帯ですね。ですから大陸から大量の淡水がそそぎ込んで、海の水と交わる場所です。そういうところでしょうかというものがあるのかなという気がいたしました。

私は京都にある総合地球環境学研究所の佐藤洋一郎先生とときどき話をします。DNAから麦や米の系統を調べている先生です。我々のプロジェクトに入ってもらっています。先生はこんなことをおっしゃいました。黄河が海にそそぐときに、泥の水と海水が単純

に混ざると思いがちですが、塩水の方が比重が重いですから、そうではなくて、塩水の上に滑り込むように泥の水が流れ込んでいくのだと教えられました。先ほど衛星画像のところでも沿海部がずっと白くなっていましたね。あれは表層の部分に淡水が広がっていたのですね。ですから、淡水と塩水が混ざるといことは、海域の環境を考えると非常に重要です。そういうところの淡水が入ったところのエビというのは、非常に白いエビが生息しているようです。中国では白蝦と書きます。車エビの一種です。

釜山は、坂が迫ったところに港ができました。朝鮮の古図にも描かれています。釜山からフェリーに乗り、対馬を通り、途中沖ノ島も見えました。そして博多に着きました。

旅順も非常に面白かったです。ちょうど黄海と渤海の境目のところの遼東半島にあります。その内側に旅順港があり、軍事上重要なところですから、旅順の街は未開放です。日露戦争のときに、日本軍がロシア艦隊を封じ込めたということがよくわかりました。出入口が非常に細いんです。内海みたいな港です。標高二〇三メートルの二〇三高地、日本軍とロシア軍が争って、このとりでを奪い合ったところから見ますと、五キロぐらい先に、旅順港が見えます。

最後にヨーロッパに行きました。ヨーロッパの同じ緯度の地中海と東アジア海を並べた地図です。ヴェネチアに行きました。ヴェネチアは日本で言う十三湊のようなリドという中州があって、島がたくさんある、そこに発達した港です。

これはジェノヴァです。ジェノヴァは日本で言う、東アジアで言う釜山のような感じがありました。あるいは神戸のような感じがし

ました。山が迫っているんですね。そこに発達した港です。市場に行きますと、こんなエイとか、モンゴウイカ、エビ、それからイワシ、アンチョビ、そういうものが見られました。びっくりしたのはアンコウをみかけたんですね。私も茨城にいたもんですから、アンコウはよく見かけたのですが、非常にきれいな白い、皮も非常にすべすべしたアンコウを見てびっくりしました。青柳正規先生とこの間話をしていましたら、地中海は閉じられた海で、非常に古いんだということ。東アジアの海というのは、大陸棚で開けた海です。深くて古い海というのは、あまり海産資源に富んでいないという、そういう話をしてくれました。また、イタリアでもぐっても魚は寄ってこなかったのが、シリアに行ったら大量の魚が寄ってきたというのです。ですからイタリアというのは実はあまり海産資源は豊富じゃないということになりました。

以上で話を終わりますが、とにかくいろんなところを見て、まだ印象だけですが、海の問題、やればやるほど面白くなっているところ。一年間、こんな形でまじめに研修してきました。